

## /s/ から /h/ への音交替について (一)

——岡山県新見市坂本方言における——

友 定 賢 治

A Study of Phonetic Change from /s/ to /h/  
in Sakamoto Dialect in Niimi City, Okayama Prefecture

Kenji Tomosada

### 1. は じ め に

岡山県新見市坂本方言の会話資料(友定賢治 1992・1993)の次の部分を見てみよう。

M チラッチラッ ショールバーじゃ ユーテ。ヘーデ ジュンコガ ウチン トコー イ  
ヌル トキ ウチン トカー ドーリャー ユキガ タマツトッタ ガ。ヒャー。イン  
ダケー ワシガ フー ユキガ アルー ユータラ アリャー シェン デ ユーテ。  
(ちらちらとしているだけだと言って。それで純子がうちのところを帰るとき、うちの  
ところはずいぶん雪が積もっていたよ。もう。帰ったから、私がねえ、《電話で》雪が  
あるかと言ったら、ありはしないよと言って。)

T ホーカ。(そうか。)

M オン。ミヤゴーチャー アリャー ヘン ユーケー。(うん。宮河内はありはしないとい  
うから。)

最初のMの発話にある「ヘーデ」のものと形は、「それで」の音変化形「シェーデ」であらうが、「それで」が接続詞として用いられるときは、「ヘーデ」が普通である。「シェーデ」も接続詞として以外では用いられるので、使い分けしているとすればどのように両者を使い分けしているかが問題になる。また「アリャー シェン デ」は、次のMの発話では、同じ引用発話でありながら「アリャー ヘン」となっている。両者の違いは何なのであろうか。先の文で「シェン」、後の文では「ヘン」になる必然性は何なのであろうか。さらに、Tの発話にある「ホーカ」は、当方言においてはむしろ「ソーカ」の方が出現頻度は高い。

これらを見るだけでも、/s/ から /h/ への音交替にはさまざまな場合があると予想できる。交替しない /s/ が一般的なものから、両者の併用の種々の段階があって、交替した /h/ が一般的なものまで、単純ではない。音交替するのはどのような場合かを丁寧に見ていく必要がある。これは、音交替しないものと交替したものとをどのように使い分けしているかを明らかにすることにもなろうし、音交替しない場合がどのような場合かを考えることにもなる。

これまで /s/ > /h/ の音交替があることはもちろん各地で報告されているものの、シからヒへの「ヒチャ・ヒチニチ」などの場合を除いては、交替の原理(なぜ、どのように、そのような交替が生じるか)に言及したものはほとんど見当たらない。広く認められる音交替であるだけに、一般的なものとして問題になりにくかったのかとも思われる。その中で注目されるのが以下のものである。

藤原与一(1974)は、徳島県那賀郡上那賀町旧平谷村方言の記述で、

多少ともくだけた言いかたをする時、らくな気分でものを言う時、ふつうに [s] > [h] は出やすいのか。

と述べている。「くだけた言いかた・らくな気分でものを言う」を交替の要因として指摘され、それは岡山県新見市坂本方言においても言えるが、その「くだけた言いかた・らくな気分でものを言う」とは、ふだんの気のおけない会話ということなのか、ルーズな発音ということなのか、今一つ明確ではないと考える。前者であるならば、その中でも、冒頭の資料にあるように、交替するしないは複雑なのである。また後者であるならば、どのようなときにルーズな発音になるのかを明らかにする必要がある。

原田英雄(1955)は、広島方言を対象として、

一つの語に複合して、いわゆる接続詞や間投詞のようにになっているものに、h 音化が起こっているようです。

と言っている。本稿でも、指摘したい内容はほぼ同内容である。ただ、なぜ、「一つの語に複合して、いわゆる接続詞や間投詞のようにになっているものに」この交替が起きるのか、交替が起きた結果、何がどう変わるのかをもう少し総合的に考察の対象にしたいと思うのである。

本稿では、岡山県新見市坂本方言において、/h/へ交替する原理は何であるかについて考察するが、この問題に関する第一報というつもりである。地域を広げての考察などは次の報告にしたい。

分析の対象にするのは、主に次の2資料である。

A 岡山県方言の研究(3)——新見市坂本方言の談話資料——(1992 自家版)

B 岡山県方言の研究(5)——新見市坂本方言における、同一話者3人による12年後の談話資料——(1993 自家版)

この資料は、老年層話者3人(M・Tの2人が男性、Nは女性)によるもので、何の遠慮もない間柄で、家族同然の関係である。録音したもの、Aは正月の昼、Bは発表者の調査が終わった後の、それぞれくつろいだ場面での自由な会話である。

その他、自然傍受によって得た資料(文頭に○印をつける)も使用し、必要によっては内省による文例(筆者の郷里方言であるため可能、文頭に\*印をつける)も加える。

## 2. /s/ > /h/ 交替の具体相

当方言の場合、交替は次の4つのケースが見られる。

### (1) [se(fe)] > [he]

M ヘージャケー ソノ ウシヤ ウマノ ドーブツノ タイドー マー ミテ ユー ワケジャ。(それだからその、牛や馬の態度を、まあ、見て言うわけだ。)

「ヘージャケー」が該当するものとされよう。

N マー ムコサンワ チットモ オランケー。ワカリヤ ヘンケー。キヤー ヘンケー。ホンニ。(まあ、婿さんは少しも居ないから。分かりはしないから。来はしないから。ほんとに。)

「ワカリヤー ヘン」、「キヤー ヘン」の「～ヘン」がそれである。

### (2) [ʃi] > [çi]

N オートサンラー ウチラー ニジューヒチンチニ モチユー チータンジャガ ナー。ハヤーブン。シェーカラ ズーット モチ。(以下略)(お父さんなんか、私のうちなど

27日に餅をついたんだけどねえ。早いぶんを。それからずっと餅。)

「ヒチンチ」というのが普通である。

- アレモ フンダラ ヒツケーケー フー。ウジリウジリ。(あいつも《酒を》飲んだら  
しつこいからねえ。うじりうじりと。中男→中女)

「ヒツケー」が一般的である。

(3) [so] > [ho]

- ホリヤー アノ ヨー ミテ ミー。ヒヤーローター オンマンケー。(そりゃああの  
家を見てごらん。入ろうとは思わないから。老男→老女)

「ホリヤー」が「そりゃあ(それは)」の交替形とされよう。

- N ホンナラ ドッカ カヨール ヤツジャ。(それならどこか飼っているやつだ。)

「ホンナラ」は「それなら→そんなら→ホンナラ」と変わったものであろう。

(4) [sa] > [ha]

- ショワーヤーテ カヨーリヤー ハッタケー フー。ワルーニ ユー モンモ オロー  
ゼー。(精出して《牛を》飼ってはいなかったからねえ。悪く言う者もいるだろうよ。  
老男→老女)

- ベンキョーヤコー ホンニ ショーリヤー ハッタ チ。(勉強なんかほんとにしては  
なかったよ。中男→中男)

[sa]→[ha]の交替は、この「～ハッタ」だけにみられる。ただし、「～サッタ」の方が使用頻度は高い。

### 3. 交 替 の 原 理

/s/ から /h/ に交替するのは上記の4つの場合であるが、それぞれに該当するものをまずあげてみよう。

(1) [se(je)] > [he]

① ヘーデ

- M ダッダラダッダラ チーテ ヘーデ モンデ ダスダケジャ ユーテ。(だったら  
だったら搦いて、それで、揉んで出すだけだと言って。)

② ヘージャケー

- M イグスリュウ ノミノミ ヘージャケー ソバー クヨール デ。(胃薬を飲み飲み、  
それだから、蕎麦を食べているよ。)

③ ヘーカラ

- M ヘーカラ コリョー ツケテ。ヘーカラ テレビュー ヤルンジャ モノー。(それ  
からこれ《ストープ》をつけて。それからテレビを見るんだもの。)

④ ヘーデモ

- M ヘーデモ ヨネチャンエー ヨー ニトル フー。(それでも米ちゃんへよく似てい  
るねえ。)

⑤ ヘージャケド

- M ヘージャケド ウソー ユータラ ホント キジローユーナ ユーテ ユワリョータ  
デ。(だけど嘘を言ったら「キジローユーナ」といって言われてたよ。)

⑥ ヘーデジャロー

- T ヘーデジャロー カ。(それだからだろうか。)

⑦ ～ヘン

N マー ムコサンワ チットモ オランケー。ワカリヤー ヘンケー。キヤー ヘンケー。ホンニ。(まあ、婿さんは少しも居ないから。分かりはしないから。来はしないから。ほんとに。)

⑧ ～ヘマー

○ アノ ソラノ カキヤー クエリヤー ヘマー。(あの上の柿は食べられはしないだろ。中男→中女)

①から⑤までは接続詞で、これらに交替が起きることは、先述のように原田英雄氏が指摘しておられるが、なぜこれらが交替するかの説明はないように思うので、その点を明らかにしなければならない。そこで、交替以前のかたちである「セーデ、セージャケー、セーカラ、セーデモ、セージャケド」が使われている場合と比較することで検討してみよう。ただ、違いがあいまいなものもあるので、明確な違いのあるもので説明したい。

○ セーデ コーテ キチャリー。(それで《そのお金で》買って来てやりなさいよ。母→娘)

この「セーデ」は「それ(代名詞)+で(助詞)」である。代名詞「それ」が独立して用いられる場合は「セー(シェー)」であって、「ヘー」と交替することはない。つまり独立性が希薄で、複合語化した中の「それ」が/h/に交替すると言える。

○ シューデ ノンジャー イケン ユンジャ ガ。(それで《酒を》飲んでだめだと言うのよ。母→息子)

二日酔いで苦しいと言っている息子の言葉を受けて言い聞かせるように言っている。これは接続詞と言えようが、内省では、

\* ヘーデ ノンジャー イケン ユンジャ ガ。

と「ヘーデ」としても可能であるが、「シューデ」の方がよりふさわしいと感じられる。息子の言葉を受けるという意識が明確で、指示する対象が強く意識されている。その点では上例と共通する側面を有している。

M オーン。ショーケジャー アジカゲンワ ニャンジャケー。ダッダラダッダラ チーテ ヘーデ モンデ ダスダケジャ ユーテ。シューデ ヤレン ソノ ミンナノ キゲンガ トレンホド ウレル ユータ デ。ホンマニ ウレル ユーケー。(うん。塩かげんだとか味かげんはないんだから。だっだらだっだら搦いて、それで揉んで出すだけだと言って。それでたまらない、そのみんなのきげんがとれないほど売れると言ったよ。ほんとに売れると言うから。)

この中には両方とも見られるが、前者「ヘーデ」は、「搦いて、揉んで出す」という一連の流れを説明しているものである。それに対し後者「シューデ」は、話が大きく転換するところである。やはり内省では

\* ヘーデ ヤレン ソノ ミンナノ キゲンガ トレンホド ウレル ユータ デ。ホンマニ ウレル ユーケー。

と「ヘーデ」であっても可能であるが、「シューデ」の方がふさわしいと感じられるものの、明確な違いとは言にくい。

これらの例から見えてくるのは、つまり/h/になったものが、指示する対象が明確でなく、実質的な意味をもたないということである。接続詞が/h/になるというのは、指示する対象が明確でなく、複合語「ヘーデ」として文をつなぐという役割を果たすという点に、その理由があるのであろう。そのようにして、「それ(代名詞)+で(助詞)」との機能の差が形態的に

も明確になる。「表現手段を有効ならしめる」(有坂秀世 1947) 方法としての音交替と考えられるのではないか。

次に「～ヘン」の場合を見てみる。二つの談話資料中に「～しはしない」が17回でてくるが、「～ヘン」と「～セン (シェン)」とは次のような割合であられる。

～ヘン	14回
～セン (シェン)	3回

このように普通は「～ヘン」となることが分かる。藤原与一 (1977) は、岡山県真庭郡旧二川村の記述の中で、

「こまりはしない」の「せん」「ヘン」など、「する」動詞の「セ」形は、「ヘ」になることが多い。(p. 246)

と述べているが、これは当方言においても当てはまることが分かる。

では、「～セン (シェン)」のままである3例は、他とどのような違いがあるのであろうか、3例を挙げてみよう。

- ①M チラッチラッ ショールバージャ ユーテ。ヘーデ ジュンコガ ウチン トコー  
イヌル トキ ウチン トカー ドーリャー ユキガ タマツトツタ ガ。ヒャー。  
インダケー ワシガ ノー ユキガ アルー ユータラ アリャー シェンデ ユー  
テ。(ちらちらとしているだけだと言って。それで純子がうちのところを帰るとき、  
うちのところはずいぶん雪が積もっていたよ。もう。帰ったから、私がねえ、《電話  
で》雪が あるかと言ったら、ありはしないよと言って。)


T ホーカ。(そうか。)

- M オン。ミヤゴーチャー アリャー ヘン ユーケー。(うん。宮河内はありはしない  
というから。)

- ②M シゴター シェンノジャケー。アガー モン クータ ユータラ トツテモ ヤレ  
リャー シェナー。ホンニ。(仕事はしないんだから。あんなものを食べたとしたら、  
とてもたまったものじゃないよ。本当に。)

- ③M ソリャー テレビヤコーエー デテモ ノー。(笑) ドーリャー プシャークナ プ  
シャークナ。(一同笑) キノーモ カツタゲン ショータロー。エネーチケーデ。ヤ  
リョータガ マー キカリャー シェン。(一同笑) (それはテレビなんかに出てもね  
え。大変に不細工で不細工で。昨日も勝田郡《のことをテレビで》してただろ。

NHK でやってたが、まあ、聞かれたもんじゃあない。)

3つとも「～ヘン」に置き換えられないわけではない。違いは微妙であるが、②③が文末にあることにまず注目したい。文末で強い否定の言い切りになっている場合、「～しはせん」の「せん (しない)」という意味が強調され、「へ」への交替がおきにくいのではあるまいか。実質的な意味をもつ場合は音交替がおきにくいという、先の場合と同じ原理がここでも確かめられるのである。①も「アリャー シェン デ ユーテ」と「アリャー ヘン ユーケー」では音調が異なり、「アリャー シェン デ」は「

次の文を見てみよう。

- M (略) ヘージャケー コノヘン ヒョージュンゴニ チキヤーター ユーテモ シェー  
コソ ジナクソコトバガ オイー。ソリャー。(だからこの辺り、標準語に近いとは  
言っても、それこそ、でたらめ言葉が多い。それは。)

○ ソレコソ グリコジャ。(それこそグリコ (お手上げ) だ。《グリコ製菓のマークから》)「シェーコソ」と「ソレコソ」とは使われるものの、「ヘーコソ」となることはない。これも「こそ」という強調形であるためではないだろうか。

このように、/h/ 音への交替を理解したいが、次のような問題が出てくる。次の文を見て行こう。

M アリョー ウエーウエー アガッテ アラテー コシエルンジャケー ノー。コシエモシェンケード。(あれを上の上に아가って, 荒砥へ越せるんだからねえ。《道がひどくて》越せもしないけど。)

○ シェーニ キモ シェナー ヤ。(それに来もしないよ。中男→中女)

○ バーヤンモ イーコソ シェンガ オモシローワ ニャー ワエー。(おばあさんも言いきそしないけど面白くはないわい。老男→老男)

「～しもせん」「～しこそせん」であるが、この時は「～しもへん」「～しこそへん」となることはない。これは強調した訴えという上記の原理で理解できるとも考えられようが、音環境という条件もあるのではないかと思われる。/h/ になるのは「Cæ:」に続くときである。

(2) [ʃi] > [çi]

ニジューヒチンチ

この音交替は、(1)のように意味にかかわるものではない。シの次にカ行音やタ行音がくればヒになるという音声的要因によるものだけである。西日本各地に見られるものでもあり、ここでは特に論じる必要はないものとする。

(3) [so] > [ho]

① ホーカ

冒頭の例文を参照願いたい。

② ホリヤー

M ヘーカラ コリョー ツケテ。ヘーカラ テレビュー ヤルンジャ モノー。ホリヤー アガラー ヤ。(それからこれ《ストーブ》をつけて。それからテレビを見るんだもの。それは《メーターが》上がるよ。)

② ホイデ

N ヨソノ ホージャー ネー ユー コトー ナー。ナー ユー ガ。ホイデ ワカルジャロー カナー オモータ。ナー ユーケー ナー。(他所のほうでは「ネー」と言うことをねえ。「ナー」と言うじゃないの。それで分かるんだろうかなあと思った。「ナー」と言うからねえ。)

③ ホンナラ

N ホンナラ ドッカ カヨール ヤツジャ。(それならどこかが飼っているやつだ。)

①②について、2資料中に、交替形と交替しない形とは次のような割合で見られる。

ホーカ	2	ホリヤー	4
ソーカ	7	ソリヤー	36

交替しないほうが普通で、交替したものが意味とか強調とかに関係しているとは思にくい。藤原与一(1974)にあった「くだけた言いかた」というのが一番該当するように思われる。勿論資料自体がくだけた会話ではあり、その中でのたまたまのルーズな発音ということではないか。

③の「ホイデ」という形はこの会話資料中にこの一例であり、これまで収集した資料にも見られず、内省でも当方言のラングとしては認めにくい。一回的な発話と思われる。「そいで」の交替であろうが、「そいで」も使われることはない。「そいで」の元のかたち「それで」の交

替形では、「シェーデ」や「ヘーデ」が頻用される。ここで、「ホイデ」が現れたのは、「ヘーデ」の「ヘー」という音が [hoi] の連母音融合形でもあり、「融合形」というのはくだけた発音なので、女性話者であるNの一回的な発言として、語源としては誤りであるが、連母音非融合形の発音をしたのであろうと考える。

④は「それなら→そんなら→ホンナラ」と変化したものであろうが、「そんなら」が使われることはない。「それなら」も、接続詞としては、よほど改まれば聞くことができるかもしれないが、まず使うことはない。ただ、

○ ソレナラ ハシラノ モテー アリョータ デ。(それ《手袋》なら柱のもとへあったよ。老女→孫)

のように使う。つまり、「ホンナラ」は、音交替形として元の形と使い分けがあるという、上例までのものと同一視することはできず、独立した接続詞「ホンナラ」と考える方がよいと思われる。

ただ、次のことに注意したい。「それなら」からは二通りに音変化していることである。

それなら  $\begin{cases} \text{シェーナラ} & \text{ヘーナラ} \\ \text{(そんなら)} & \text{ホンナラ} \end{cases}$

「シェーナラ・ヘーナラ」は頻用され、先述のような事情で音交替が起きている。そして、「ホンナラ」は、元をたどれば「それなら」であるものの、独立した語として存在するのであろう。

#### 4. お わ り に

本稿で /h/ に交替する原理として指摘できたのは、この交替を説明する一原理ということであろうと思う。位相・場面などを考慮に入れた、より総合的な考察が必要であるし、地域を広げて考えることも無論必要である。いずれも第二報以降のこととしたい。

#### 引用・参考文献

- ・有坂秀世 (1947) 『音韻論』(三省堂)
- ・金田一春彦 (1953) 「音韻」(『日本方言学』吉川弘文館)
- ・原田英雄 (1955) 『広島方言概要』(自家版)
- ・柴田 武 (1958) 「言語変化の要因と過程」(『講座 現代国語学Ⅲ』筑摩書房)
- ・土井洋一 (1964) 「ことばの『ゆれ』」(『講座 現代語』第六卷 明治書院)
- ・藤原与一 (1974) 『昭和日本語の方言第2巻 四国三要地方言対照記述』(三弥井書店)
- ・神部宏泰 (1975) 「中国の方言」(『方言と標準語——日本語方言学概説——』筑摩書房)
- ・藤原与一 (1977) 『昭和日本語の方言第4巻 中国山陽道三要地方言』(三弥井書店)
- ・加藤正信 (1980) 「言語の変化の地理的・社会的背景」(『講座 言語2 言語の変化』大修館)
- ・杉戸清樹 (1983) 「社会言語学」(『言語生活』376号)
- ・西尾寅弥 (1983) 「語形の『ゆれ』」(『日本語学』2-8)
- ・柴田 武 (1985) 『生きている日本語』(講談社学術文庫)
- ・藤原与一 (1990) 『中国四国近畿九州 方言状態の方言地理学的研究』(和泉書院)
- ・友定賢治 (1992) 岡山県方言の研究 (3)——新見市坂本方言の談話資料——(自家版)
- ・友定賢治 (1993) 岡山県方言の研究 (5)——新見市坂本方言における、同一話者3人による12年後の談話資料——(自家版)

—平成8年9月30日 受理—